



藤田嗣治 × 国吉康雄： 二人の平行・キャリア—百年目の再会 2025年6月14日(土)～8月17日(日)

兵庫県立美術館
学芸員 橋本 こずえ



国吉康雄《誰かが私のポスターを破った》
1943年 個人蔵

兵庫県立美術館では、20世紀前半の激動の時代に海外で成功と挫折を経験した二人の画家の展覧会を開催します。藤田^{つぐはる}嗣治（1886-1968）は、美術学校を卒業後にパリに渡り、1920年代に「素晴らしき乳白色」の裸婦を描いて一躍時代の寵児となりました。一方の国吉康雄（1889-1953）は、労働移民として渡米したのち画家になることを志し、1948年にはニューヨークのホイットニー美術館で現存作家初の個展を開催するなど、高く評価されました。異なる地で活躍した二人の画家に焦点を当てた本格的な展覧会の開催は、国内外の美術館で初めての試みとなります。

展覧会は、平行に制作をつづける二人の作品を年代ごとに向かい合わせる構成となっています。1925年と28年に国吉は、藤田が活躍していたパリに長期滞在します。二人が直接会話を交わしたことのわかる資料は見つかっていませんが、画家のジュール・パスキン、清水登^{とし}之などの共通の友人たちがいました。藤田がニューヨークに滞在した1930年から31年には、二人が少なくとも3回会ったことが記録されています。本展では、紐育日本人美術協会主催の藤田の歓迎会で描かれた二人の席画を初めて公開します。アメリカ滞在中には、藤田が日本の画家・有島生馬へ国吉を強く推薦する紹介状を書いたことも知られています。しかし、太平洋戦争の勃発によって、当時日本に暮らしていた藤田とアメリカの国吉の関係性は破綻することとなりました。戦後の1949年、藤田が10カ月間ニューヨークに滞在したとき、立場の隔たる二人の再会は叶いませんでしたが、国吉は藤田の個展会場に足を運びました。

国内の所蔵者からお借りした主要作品120点を通して、画家たちの活躍した時代を感じ取れるものとなるでしょう。ぜひ、会場で二人の「再会」をご覧ください。

※この特別展は、みなと銀行文化振興財団が助成しています。